



1998. 10. 6

No. 5

今日の家族をつつんでいる状況は、非常に^{きび}厳しい。家族内での男女平等の実現は、家族の中だけで実現できるものではない。

憲法第24条の理想「両性の本質的平等」を実現するには、数多くの課題を解決しなければならない。その一つが、「過労死問題」である。日本の社会の男性が職場で追^こい込まれている状況は、世界の中でも最悪である。職場でくたくたになるまで追いつめられている男性が、家庭で父親の役割を果たすこと、夫として妻と家庭責任を平等に担^{にな}うことが果たして可能か。仕事に命^かを懸けなければ、日本の社会では職場を追われる。つまり、家庭に埋^{まい}没^{ぼつ}することは、今日の日本の社会では失業することを意味するのだ。次に紹介する手記を読んでみよう。

おとうさんへの手紙

東京都文京区 安田 秀美（40歳）

1990年2月、環境調査会社勤務^{きんむ}の夫が突発性心機能^{とつぱつせいしんきのう}不全^{ふぜん}で死亡。当時40歳。

あなたは覚^{おぼ}えているでしょうか。
長女^{しほ}の志歩が2歳のとき、朝出かけるあなたを見送りにでた玄関先で言いました。「おとうさん、またあそびにきてね」。戸^とが閉まると、「おとうさんのおうちはどこなの？」と私に聞きました。あとであなたにその話をしたら、あなたは目に^{なみだ}涙^うを浮かべ、なにも言いませんでした。そのころのあなたは1カ月370時間も働いていました。あなたの勤める環境調査会社では、騒音調査^{そうおん}は24時間連続で、まる2日続くこともありました。そのうえ、人が不足し、大気汚染の調査も、途中から兼務^{けんむ}することになりました。有給^{ゆうきゆう}休暇は4年間でたった1日とれただけでした。

父親の参加の少ない家庭生活で、あなたの姿を子どもたちに感じさせたいと、おもちゃや絵本を買うにも「お父さんが一生懸命^{いっしょうけんめい}働いて買ったのだから大切に使ってね」と、ことあるごとに言い聞かせていました。あなたの姿を見たことのない人は、母子家庭だと本当に思っていたそうです。

あなたが亡^なくなってから1年5カ月。志歩は5歳、美佳は4歳、保育園の年長^{ねんちょう}さんと

ねんちょう

年^{ねん}中さんになりました。3人だけになってどうやって生活をしていったらいいのか、なにも考えられず、あなたが生前^{せいぜん}残^{ゆい}していた遺言^{たよ}を頼りにいったんはいなかへ帰ったのですが、いまは都内で男子寮^{とない}の寮母^{りょう}として住みこみで働いています。子どもたちに淋^{さび}しい思いはさせたくなかったため、そして私自身不眠症^{ふみんしょう}になり、薬に頼る生活をしたくなかったため、日中働いてクタクタになる仕事を選んだのです。

子どもたちは成長するとともに、あなたのことはほとんど記憶^{きおく}に残らなくなっていくようです。それでなくても家ですぐすことはあまりありませんでしたから、あなたの印^{いん}象^{しょう}は薄^{うす}いのかもかもしれません。いまでも、あなたのいない生活のなかで淋^{さび}しくはないようです。

子どもたちのあなたへの手紙です。一生懸命考えていました。読んでくださいね。

おとうさん、やさしかったね。おとうさんありがとう。やさしいおとうさんだったね。あそんでくれてありがとう。ほんよんでくれてありがとう。だっこしてくれてありがとう。かたぐるまもね。おもちゃかってくれてありがとう。

でも、もっとおもちゃかってほしかった。おふろでいっしょにあそんでほしかった。もっとだっこしてほしかった。こうえんとかいろんなところにつれて行ってほしかったなあ。 みか

おとうさん、げんきですか、しほはいまほいくえんにいっています。おともだちもたくさんできました。せんせいはやさしいです。おともだちとなかよくあそんでいます。ははのひにはおかあさんのえをかきました。ちちのひにもおとうさんがいないからおかあさんのえをかきました。ほじょなしのじてんしゃにものれるようになりました。とってもはやくのれるよ。うーんとうれしかったよ。

おうちでは、おにいちちゃんたちがだっこもかたぐるまもしてくれるよ。じてんしゃのりのれんしゅうもてつだってくれたよ。

おとうさんのゆめをみたよ。おとうさんとおかあさんとみかちゃんとしほとうたをうたったんだよ。たのしかったよ。

あのね。おとうさんしんでね、おかあさんがいっぱいいないたの。しくしくってね。それでね、おかあさんに「もうおとうさんはしんでしまったんだからあきらめなさい。そんなになくとおにいちちゃんたちにきらわれるよ」っていったの。でもね、おかあさんまだなくんだよ。ときどき。「もうやめなさい」ってね、いうの。それからね、「おとうさんのことはおぼえていてもいいからもうぜったいなくのやめなさい」ってね。

おとうさんなんでしんだんだろうね。はたらいてつかれたの？ きっとつかれてしんだんだよ。おかあさん。

あのね、しほね、おとうさんがほしいの。しゃしんにうつっているおとうさんほしい。おとうさんがいきていたらね、いっしょにあそぶの。やさしいおとうさんだったからね、やさしくしてもらおうの。「おとうさん」っていつちゃうの。それからいっぱいいろいろなところに行くの。それからいっしょにおえかきするの。それでね、おとうさんのえをかくの。

おとうさん、げんきでね。さようなら。

しほ

お父さん、子どもたちの声が届きましたか？

あなたが仕事をしていたころ、毎晩（朝）帰宅の遅いのには私が心配して、転職をすすめたことがありました。会社をやめてほしいと何度も言いましたね。でも、家族のためにこれだけの仕事をしているのだ、社会的責任もあるのだと、そして私が自分の気持ちを理解してくれないと、あなたは言いました。そして死んでしまった。あなたが守りたかったものはなんだったのですか。死ぬほど大切にしていたのは、なんだったのですか。

亡くなってから、同僚の方に言われました。「子どもたちに誇れる仕事をした」と。あなたが生涯をかけてやりたかった環境保全の仕事はたしかに、だれにでもわかるほど素晴らしい仕事だと思うのです。そして真面目に努力して、コツコツと仕事をやりとげ、評価も受けた。やりたい仕事で死ねて本望ですか？ これは皮肉に聞こえるでしょうか。

日曜日の晩、前日出勤したまま帰宅しないあなたを、思いあまって迎えにいったことがありました。現われたあなたの目は血走り、日のまわりはどす黒くなっていました。帰宅のタクシーのなかでも仕事の話をつづつ。仕事という魔物にとりつかれたかのよう、仕事以外の話には耳も貸さず…。本当に、真からの仕事人間なのだと思います。私がいくら言ってもわかってもらえないのは当然でしたね。

でも、どうしてそこまで追いつめられてしまうのでしょうか。会議のたびに徹夜で資料を作り、問題があると言っては暗い表情で帰宅し。あなたの遺品となった通勤カバンのなかには副社長が書いた社報の1ページのコピーが入っていました。くり返し読んだのでしょうか。ボロボロになっていました。

子どもたちが成長したとき、なんと言ってあなたの姿を伝えたらいいのでしょうか。あなたが亡くなって、あなたがなにを考えていたのかわからなくなってしまいました。

いまでもときどき、あの朝のことを思い出します。私が起きたとき、もうあなたは寝

室で、息もなく冷たくなっていました。私には、あなたに「ありがとう」も「さようなら」も言う時間すらありませんでした。

前日、1年に何回あるかというほどめずらしく子どもたちにおみやげを買って帰宅し、ヘタヘタと座りこみました。でもその後、子どもたちに、笑顔でいかにも楽しそうに本読みをし、私には子どもたちの将来のことを話しました。まるでこの世でやり残した仕事を最後に片づけるかのように「一家団欒」を演出していました。子どもたちにとって、買ってきたおみやげよりも何倍か楽しい時間のプレゼントだったと思います。

母子家庭になって以来、本当にいろいろな経験をしました。40歳近い女の就職は本当にむずかしいものです。「夫が過労死をした」とか、「労災申請中です」と言うだけで、不採用になったこともずいぶんありました。「めんどうな問題を持ちこまれてはたまらない」と経営者は思うのでしょうか。つらい目にあっても、あなたが疲れながらも仕事に取り組んだ姿を思い出し、子どものためにがんばろうと必死でした。髪もチラホラ白くなってきましたよ。冬場の手荒れはひどかったんですよ。でも、働いている手だ、遊んでいない手だ、子どもたちに自慢できる手だと思いました。

お父さん、あなたが生きた時代は日本にとってどんな時代なのでしょうね。命を、人の生活の営みを、これほど大切にできない日本はひょっとしたら戦争をした時代同様、病んでいるのではないのでしょうか。子どもたちが成長し私の手を離れていくとき、いまと同じような社会が彼女たちを待ち受けているのでしょうか。

1991年7月30日、労災の申請をやっと出しました。やっと、です。1年5カ月かかりました。ここまで来るだけで、もうエネルギーを使い果たしたような気がします。これほど暗くて重い宿題をいつまでかかえていなければならないのでしょうか。

お父さん、どこかで私たちを見守ってください。そして、あなたが生きた時代がまちがっていたんだと思えるような未来が来るよう、子どもたちが巣立つころには、いまよりも明るい社会になるよう祈ってください。

お父さん、ありがとう。

＊＊ 引用文献 ＊＊

『過労死・残された50人の妻たちの手記

日本は幸福か』教育史料出版会 1991. 11. 25 pp. 10-15より

（ふりがなは、倉橋がつけた）